

機関番号：82649

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720040

研究課題名（和文） 岩佐又兵衛における集団制作システムの解明

研究課題名（英文） A Consideration to Production Systems in Iwasa Matabei's studio

研究代表者

廣海 伸彦（HIROMI NOBUHIKO）

公益財団法人出光美術館・学芸課・その他

研究者番号：10518393

研究成果の概要（和文）：

江戸時代はじめの画家・岩佐又兵衛（1578-1650）の作品には、しばしば複数の異なる画家の様式が混在していることが指摘される。又兵衛が工房を組織して作画活動を展開していたことは、ほとんど疑いない。本研究の目的は、又兵衛の工房制作の様態を、実作例に即して明らかにすることである。そのために、広い意味での又兵衛作品の調査を重ねデータを集積したのち、作品ごとに認められる表現様式上の異同を抽出し分類することを試みた。

研究成果の概要（英文）：

Iwasa Matabei (1578-1650), a painter in the early Edo period, often shows intermixed style of different painters in his works. There is almost no room for doubt as to organizing Matabei's studio to develop his activity as the painter. The purpose of this study is to clarify the actual circumstances around production systems in his studio based on examples. The paper collects, therefore, data of 'Matabei's work in a broad sense' through investigations. Subsequently it extracts and classifies dissimilarities which can be found among his works.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：岩佐又兵衛、又兵衛様式、工房制作、古浄瑠璃絵巻群、大和絵、源氏絵、伊勢絵、歌仙絵

1. 研究開始当初の背景

岩佐又兵衛（1578-1650）は、あらゆる主

題の絵画に旺盛な作画意欲を示し、新奇な描写を追及した。近年、この日本絵画史上でもひととき興味ある絵師について、近年の研究

は作品研究を通じた主題論や受容論が展開されている。

さて、1960年代より、辻惟雄氏などが重ねてきた又兵衛研究によって、この画家が工房を組織し、複数の弟子を操りながら作画活動を展開していたという見解が、ほとんど定説となっている。このような提言は、「又兵衛筆」と伝称される多くの作品の筆者問題について、一定の合理的な説明を持たせるものであるに違いない。だが、その一方で「又兵衛風」や「又兵衛様式」といった、作家研究においてはその実態をほとんど何も言いあらわさない用語が安易に使われるあまり、厳密な意味での筆者論が長らく棚上げされてきたことも事実であろう。様式批評をなくしては、近年の魅力ある作品論議も確度や深みを失いかねない。「又兵衛様式」や「又兵衛風」といっても、実際の作品に示される表現の振幅は大きい。様式判断の尺度は、今もって存在していないのが現状であった。

2. 研究の目的

又兵衛は、京都で青年期を過ごしたのち、1616年頃、福井へ活動の拠点を移す。さらに、福井での20年余りの期間を経て、江戸で絵画制作を展開する。又兵衛は、三つの都市のそれぞれで工房を組織したと思われるが、その実態について知ることはあまりに少ない。又兵衛の工房制作という問題を考える上で、検討すべき項目は、おおよそ以下の3つがあるだろう。

- (1) 又兵衛の異動と工房の拠点の関係
- (2) 各地の工房における成員や規模
- (3) 工房における分担の実態

本研究は、残された作品の色とかたちの分析によって、工房制作の諸相を明らかにすることを目的としている。

あわせて、「又兵衛様式」という、場合によっては際限なく拡大してゆくおそれのある概念と用語に一定の基準を設定することを目指している。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、次のような手順を踏む。

(1) まず、絵画主題や形式に基づいた枠組みを意図せず、又兵衛の印章や落款をそなえ、表現の上でも又兵衛が制作に関知したことが疑われない作品（これらを「勝以画」と呼ぶ）について調査を実施する。とりわけ重視

されるのは、現存するもののなかでは又兵衛の画業の最初期に位置づけられる、「碧勝宮図」朱文方印をおす作例である。これらの作品の詳察を通して、できる限り未分化の状態の又兵衛様式について、その表現の特徴を具体的に把握することにつとめる。

(2) 次に、画中に落款や印章などは見られないものの、伝承される筆者や絵画の表現そのものから又兵衛の関与が示唆される作品（工房制作によってなされたものが中心となる）の精査に移る。「山中常盤物語絵巻」、「上瑠璃物語絵巻」、「堀江巻双紙」（いずれもMOA美術館）がもつばらの対象となるが、調査は源氏絵や歌仙絵におよぶ。これらの観察結果を受けて、勝以画との比較を行ない、先に確認した又兵衛の様式との異同を個別に考察する。さらに、異なる作品のあいだで相互に共有される描写の特徴について抽出と分類を試みる。

4. 研究成果

調査は、国内外の所蔵機関（個人を含む）計14ヶ所におよび、作品の総数は76点にのぼった。以下、印章の種類や主題のまとめごとに、暫定の観察結果を報告する。

(1) 「碧勝宮図」朱文方印をおす絵画

もと押絵貼屏風であった、いわゆる金谷屏風（東京国立博物館ほか。計10図が掛幅装で現存）は、又兵衛の画業のなかで最も早い時期に制作されたと考えられてきた。本研究では、中国主題の3図について、中国版本との比較を試み制作時期を裏づけた。その上で、典拠の形態を収奪し意味内容を改変することに、又兵衛様式の原初的な特質を求めた。いずれも、粗放で奔放な筆線が墨の面をつくっている。抽象的なかたちの面白さそのものを目的とし、さらにもとものかたちが持っていた意味を上書きすることを志向しているようである。このような傾向は、「人麿・貫之図」（MOA美術館）など、同じ印章をそなえる作例にもおおよそ認められるものである。

(2) 歌仙絵および大和絵主題の絵画

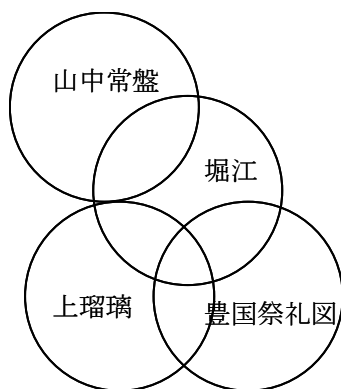
ただし、金谷屏風と同じ「碧勝宮図」印をいくつかの図に持つ、福井県立美術館の「三十六歌仙図」には、少なくとも3つの異なる様式が認められる。画業の早い段階から、工房制作が行なわれていたことを示唆する事柄だが、その表現のいずれにも金谷屏風などに顕著に示されたような、形態のデフォルメやかたちが持つ意味の読み替えなどは志向されない。晩年に工房内で量産されたと思わ

れる歌仙絵群も、およそ共通した傾向を示す。歌仙絵のほか、源氏絵や伊勢絵といった大和絵の主題の絵画は現存する又兵衛画において質量ともに充実しているが、歌仙絵の事例と同様に、先行作例や同時代にすでに定着していた型（パターン）を素直に利用したものが目立つ。それに同調するように、絵画の表現様式も「碧勝宮図」印をもつ絵画が備えていた特徴を薄める傾向へとむかう。

(3) 古浄瑠璃絵巻群

又兵衛の工房制作システムがもっとも活発に機能したのは、おそらく福井を拠点に作画活動を展開していた 1620～30 年代の頃だろう。その時期の作例として、古浄瑠璃絵巻群と総称される長大な作品群がある。そのなかで、本研究では、MOA美術館にある「山中常盤物語絵巻」（以下、「山中常盤」）、「堀江物語絵巻」（以下、「堀江」）、「上瑠璃物語絵巻」（以下、「上瑠璃」）の 3 件について、調査の機会に恵まれた。いずれも 10 巻を越える画面をひとりの絵師の様式に帰すことは、もとよりむづかしい。本研究においても、集団制作が観察の前提となる。

さて、又兵衛の影響をもっとも色濃く伝えるのが「山中常盤」であるという先行研究の提言は本研究でも確認されることである。ただ、様式の振幅はことのほか大きい。私見では「山中常盤」の最終盤を手がけた絵師は「堀江」の序盤にも筆をふるっている。また、「堀江」の制作に加担した絵師の一部は、「豊国祭礼図屏風」（徳川美術館）の絵師のひとりに等しいと思われる。従来指摘される「豊国祭礼図屏風」と「上瑠璃」との関係を加えて、これらの関係をごく大まかな図で示すと、次のようになる（挿図）。



（挿図）工房制作の関係

なお、「豊国祭礼図屏風」については、主題解釈を主眼とする拙論のなかで、「平治物語絵巻」からの図様転用の事実を指摘した。論文の趣旨は、屏風絵の制作契機として乱世を追懐する意識が働いていることを推察す

ることであった。ただ、考察を筆者論に敷衍すれば、このような巧妙な操作が、又兵衛の参与なしになされたとは思われない。

この屏風絵に認められたような、かたちと意味のきわめて機知的な操作は、「碧勝宮図」印をおすいくつかの作品から引き継がれたものだ。表現様式の比較検討に加えて、このような趣向の有無は、又兵衛の関与の度合いを測るひとつの指針となりそうである。

(4) 篆文「勝以」朱文円印をおす絵画

又兵衛が晩年期に使用したと思われる、篆文「勝以」円印をおす作品は、様式の判断にむづかしいものが多い。とくに、円印の外郭を二重に残したものと、一重のものとの様式上の隔たりは少なくなく、後者の一部には又兵衛と無関係の模倣作と考えるべき種類の絵画も含まれるようである。これは、又兵衛とその工房の消長について考える上で注意すべき事項となり得る。

最後に、2 年間におよぶ作品調査の過程で、新たに 3 点の未公開作品が見出されたことも、本研究の特筆すべき重要な事柄である。これらの作品の詳細な図版は、辻惟雄・佐藤康宏監修編著『岩佐又兵衛全集（仮題）』（2011 年度中に刊行予定）において、詳細な解説とともに紹介される予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 廣海伸彦、「四季耕作図屏風」における岩佐又兵衛と古典、出光美術館研究紀要、15 号、113～128 頁、2009 年、査読なし

② 廣海伸彦、乱世の追懐—「豊国祭礼図」（徳川美術館）の主題解釈—、美術史、59 巻 2 号、293～307 頁、2010 年、査読あり

〔学会発表〕（計 2 件）

① 廣海伸彦、岩佐又兵衛の《奇想》—金谷屏風における模倣性と創造性について—、学習院大学哲学会、2010 年 11 月 27 日、学習院大学

② 廣海伸彦、岩佐又兵衛筆伊勢物語東下り図について、第 227 回日本近世絵画研究会、2011 年 3 月 4 日、出光美術館

〔図書〕（計 2 件）

① 神谷浩（責任編集）・廣海伸彦ほか、藝華書院、日本美術の特質—小林忠先生古稀記念論文集—（仮題）、総頁数未定、2012 年（予

定)

②辻惟雄・佐藤康宏（監修編著）・廣海伸彦
ほか、藝華書院、岩佐又兵衛全集（仮題）、
総頁数未定、2012年（予定）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣海 伸彦 (HIROMI NOBUHIKO)
公益財団法人出光美術館・学芸課・その他
研究者番号：10518393

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし